

浄

monthly
JŌDO

土

February.March 2009 合併号

2・3



法然上人讃仰会



衆生、仏を礼すれば、仏これを見給う。

衆生、仏を称うれば、仏これを聞き給う。

衆生、仏を念ずれば、仏も衆生を念じ給う。



(勅修御伝)

呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

2月号『梅に金鶏／梅に椿と鳥』

浄土

2009/2・3月合併号 目次

八宗の泰斗 福田行誠	福田行慈	2
小説快僧渡辺海旭『壺中に月を求めて②』	前田和男	8
新連載 「朝めし」礼賛	麻生タオ	14
変な駅気になる駅	村上健／長谷川裕	16
会いたい人 妹尾河童さん③	関 容子	24
江戸を歩く 第二十四回	森 清鑑	32
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48
教えと法話	生野善應	

表紙題字＝中村康隆前浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎



八宗の泰斗 福田行誠

大正大学非常勤講師
東京深川本誓寺住職

福田行慈

ある人が日本における僧侶の人数を尋ねられたところ、「僧侶は一人半おります。一人は行誠上人、その他の僧侶を合わせて半人前です」と答えたそうです。また、明治の仏教界を評して、「宗派を見ず、ただ行誠一人を見る」という言葉があり、さらに福田行誠は「八宗の泰斗」と呼ばれました。これらはまさに明治仏教における福田行誠の位置を示しています。

行誠は文化三年（一八〇六）に武蔵国豊島郡山谷（今の東京浅草あたり）で生まれました（一説では文化二年・六年）。行誠は生前中、両親や出自などについて詳しく話しておりませんが、俗姓は岡田でした。ちなみに福田（ふくだ）は、明治五年（一八七二）の太政官布告によって僧侶も苗字を名乗るように指示され、「福田（ふくだん）」という仏教語から付けられた姓で、「福德を生み出す田」という意味です。

幼くして伝通院にて得度した行誠は、その後伝通院の学寮で修学しましたが、漢学や和歌についても学びました。文政八年（一八二五）十九歳の時、さらに学問を究めたいと思い上洛し、嵯峨正定院の立道について修学しました。このほか宗内外の碩学にも教えを受けましたが、中でも天台を学んだ比叡山世尊寺の慧澄に行誠は深く傾倒しました。慧澄は江戸末期における天台宗の学僧の第一人者で、日本の天台智者大師とまで言われました。後に慧澄は江戸に下向し寛永寺浄名院に住しますが、師弟関係は慧澄が亡くなる文久二年（一八六二）まで続き、行誠にとって彼の影響は絶大なものでした。行誠は「自分は幸にも仏法に出会えた。特に慧澄和上に出会えたことを、この世に生まれて得ることができた最良の思い出と思っている。」（「慧澄和上略伝」と、慧澄との出会いを喜んでいます。文政十一年の冬、行誠は江戸に戻ります。再び伝通院で浄土宗学・俱舎・唯識を、寛永寺浄

名院の慧澄から天台・俱舎を学び、さらに伝通院学頭、山内清浄心院住職と後進指導の立場へと進みました。

行誡は「八宗の泰斗」と称されたように、浄土宗にとどまらず、仏教全般にわたって兼学しております。行誡は「仏法は本来無宗旨であるにもかかわらず、世の中の僧侶は自宗の考えばかりに執着して、これが仏法であり、これ以外に仏法は無いなどと主張して仏法全体を見ずに、せっかくの広大な仏法をケチな仏法にしてしまい、宗旨の意味を誤解し、仏法の大体を失い、知らないうちに外道となってしまうことを心配しています。仏法の全体は無宗旨であることを仏教修学の土台と心得て、各宗一致して広大なる仏法を世に弘めることを願っています。」（「宗旨の事」と述べています。また、「その昔、諸宗には兼学の高僧が大勢おりましたが、今は一人二人しか思い浮かびません。三論宗の僧が法相・真言を伝え、法相宗の僧が禪を伝える、これが仏法本来のあり方です。天台宗だから法相を知らないとか、禪宗は禪以外のことは知らないなどと云うような奇妙な話では仏法とは言えません。昔のように常に八宗兼学して、教相者は禪学を、禪者は教相を学ぶべきであります」（「兼学の弁」とも言っています）。

行誡が傾倒する僧侶の一人に慈雲尊者がおりました。慈雲は江戸中期の真言宗の僧で、十善戒（殺生・偷盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・邪見の十悪を犯さない戒め）の実践を説く正法律という釈尊当時の戒律を復興しようとしていました。行誡はこの精神に従って、僧侶が本来守るべき厳しい戒律にも目を向け、自ら持戒清浄を貫きました。このように行誡は、浄土宗という一宗派にこだわらず、仏教全体を見渡し、僧侶として進べき道を信念をもって歩んでいきました。

行誠は僧侶・在家信者から信望される存在でありましたが、その話し方は江戸弁を使っただけで、温和でさっぱりした性格で洒落な面もあったため多くの人々から慕われておりました。慶応二年（一八六六）の十二月、行誠は両国回向院の住職になります。以前から行誠は町寺すなわち檀家寺には住したくないと思っていました。それは学僧としての生活が行誠の理想であり、葬祭などに関わることは僧侶の本道ではないと考えていたからです。とはいえ何度も檀信徒の懇願があり、行誠は回向院の住職を承諾したようです。

行誠は約十年間回向院に住しますが、この間は仏教界にとって危機ともいうべき時期に当たります。明治元年（一八六八）三月、政府から神仏分離令が布告されます。日本に仏教が伝来して以降、神仏習合・本地垂迹の思想などにより、仏教と神道は混淆してきましたが、維新政府は王政復古の名のもと祭政一致・神道復古をめざし、神道と仏教とを明確に分けることにしました。神社から仏教色を排する「排仏」が目的であったにもかかわらず、以前から不満を持っていた神官をはじめとする人たちが寺院や仏像などを破壊して仏教を廃する「廃仏毀釈」という無謀な行為が起こってしまったのです。さらに明治五年四月には、「自今僧侶の肉食妻帯蓄髪は勝手たるべき事」の布告が出され、法律上僧侶を俗人として扱うという事にもなったのです。また十一月には、神仏合併大教院が東京紀尾井町の紀州邸跡に開設され、各宗寺院は小教院として檀家の子弟を教導することになりました。のちに大教院は増上寺に移りますが、神道主体ですから三門前に白木の大鳥居が据えられ、本尊ははずされて神鏡が安置され、しめ縄が張り巡らされるといった状況になってしまったのです。そして、僧侶は神官の後ろにつき拍手礼拝をすること、教部省の定めた神道中心の「三条教則」を檀家に説くことなどを強制されたのです。

このような状況下で行誡は、まず自ら反省し、僧侶側の自覚自責を明らかにし、難局に立ち向かったのです。諸宗の大徳と結成した同盟総賛の教頭であった行誡は、肉食妻帯解禁令に対し即座に「肉食妻帯蓄髮勝手次第」という建白書を政府に提出し、この新令の取り消しを申し出るとともに、各宗本山の住職に新令に従わず持戒清浄の生活を守るよう促しています。明治十年九月、行誡が各宗管長連署の上、再度新令の撤回を求めた結果、翌年二月、内務省は各宗管長宛に「先年の布告は古来から禁止していた国法を廃止したままで、宗規には関係ないことであると心得よ」と通達してきたのでした。しかしこの間、多くの僧侶が肉食妻帯するようになったため、行誡らの努力も空しく以前の状態に戻すことは叶いませんでした。

また、行誡は「三条教則」について「これを説教しろと命ぜられたとき、私はこのような神官らの手伝はしないと申しました。しかし、強いて言えと言うなら言わないことはいけれども、その代わり同じ三条でも仏教では説き方が違います。元来世法と仏法とは仲が悪いものであり、一つにすることはできません。」（「仏法と世法」）と批判しております。このような仏教側の反対もあって、明治八年四月に神仏合併大教院は神道と仏教に分かれ、それぞれに大教院が置かれることとなり、浄土宗では改めて増上寺に大教院が設置されたのです。

さて、回向院を辞した行誡は、明治九年十月伝通院に貫主として戻りますが、明治十二年五月に増上寺に晋山します。同六年大晦日に増上寺の大殿は放火により焼失しており、大殿再建のための資金勸募が行誡の使命でした。就任早々の翌十三年一月二十八日、行誡は増上寺を出発して京都に向かいます。新橋から汽車で神奈川に行き、その後は徒歩・人

力車・馬車・船などによって移動しました。三十一日には箱根塔ノ沢の元湯に宿泊しますが、明治十年九月に和宮が亡くなった宿であることから、行誠はその座敷で同行の僧十人とともに読経念仏して、僧たちに布施物を引き、追善のために昼食を齋食として皆にふるまっています。翌日雨・雪の中、箱根山を越えて三島に向かいますが、頂上の茶屋で昼食をとったとき、茶屋の主人から揮毫を頼まれます。日蓮宗の信者であることを聞いた行誠は、「南無妙法蓮華經」の題目を書いて主人に渡しています。二月中行誠は、沼津・駿府・浜松等に滞在し、その後、岡崎大樹寺等に立ち寄り、伊勢神宮を参拝し、三月十七日に京都に到着しています。先々の寺では法話・授戒を行ったり、名号・額面などの書幅を書く毎日でした。ことにこの年は善導大師の一千二百年遠忌にあたっており、各寺で善導忌が勤められていました。

いつ行誠が増上寺に戻ったかは不明ですが、六月には「増上寺大殿再建勧誘文」を記し費用の寄付を呼びかけています。休む暇もなく行誠は六月二十日に東北地方への巡錫に出かけ、十二月二十六日に帰山します。七十四歳という行誠の高齢を考えますと、この年の行動は驚異的であると言えます。それだけ大殿復興に尽力していたことがわかります。以降大殿復興のメドが立って明治十九年三月に増上寺を退くまで、行誠の巡錫は続きました。弟子福田循誘の住する深川本誓寺に隠棲した行誠でしたが、宗制をめぐる浄土宗東西が混乱する中、翌二十年四月内務大臣より知恩院住職に任命されます。五月には「浄土宗制」がようやく制定され、ここに一宗の代表である浄土宗管長に就任しました。しかし、十月巡教先の大阪で病になり、翌二十一年四月二十五日に塔頭信重院で遷化しました。

※昨平成20年は行誠没後120年にあたり、これを記念して本年3月より『平成新修 福田行誠上人全集』（全七巻）が刊行されます。2月末日まで予約割引受付中です。詳細はUSS出版（0120-482-471）、本誓寺（03-3641-6804）までお問い合わせください。なお、最終巻「遺墨集」準備のため行誠の遺墨情報を調査中です。所蔵されている方は本誓寺までご連絡いただければ幸いです。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二回

相馬黒光との
出会いと別れ 其の二



相馬黒光が渡辺海旭と初めて出会ったとき、黒光は長女・俊子の逆縁の死に加えて、もうひとつ大きな悩みを抱えていた。末子の虎雄の行状である。左翼運動に関わり逮捕、獄へ繋がれてしまったのだ。かつては左翼にシンパシーをもってその庇護者（パトロン）を任じていたのにいまや右翼の大物に傾倒する母親に虎雄は猛反発し、親子の溝は埋めがたいものになっていた。当時「アカ」の烙印を押されることは社会的な死を意味していた。俊子の逆縁の死と虎雄の社会的死に、黒光の悩みは深かった。

黒光は思い出した。そうそう海旭先生の韋提希夫人の講話、あれで私は救われたのだ。

それは海旭が『観無量寿経』の講話の中で示したこんな逸話だった。

韋提希夫人とは古代インドの後である。息子の王子が夫である王を幽閉して餓死させようとしたので、装身具に飲み物を満たして牢を訪ねて王を養おうとするが、これが発覚。

夫人もまた息子の王子によって幽閉される。夫人は釈尊がおわすあたりへ向かって「なぜこのような苦しみを受けるのですか」と泣いて訴える。

このくだりで黒光は我がことに思えて涙があふれ出て止まらなかった。すかさず海旭は、「韋提希夫人の悩みは世界中の母の悩みのうちで最大のものである」と示唆、そこで黒光は奥深い覚悟と安堵を得たのだった。

海旭の講話は黒光の精神生活だけでなく実業生活にも大いに効能があった。

師・海旭いわく「随其心淨即仏土淨」。すなわち、日常の生活が即信仰でなければならぬ。家庭を離れ、商売を捨ててどこに宗教生活を見出せるものか。

海旭のこの講話に、黒光は山の奥や天空に浄土は転がっていないことに思いいたった。かくして黒光の隠遁生活への憧れはあとかたもなく消えていった。消えただけではない、仕事への情熱がいつそうわいてきた。娘婿の

ボースから伝授された純印度式カー、同じく黒光が庇護者でありつづけたロシアの亡命盲目詩人エロシェンコから伝授されたボルシチ、そして夫婦で中国へ出かけたときに発見をした中華饅頭に月餅などのヒット商品が陸續と生まれ、社業はますます発展していく。そんな新商品のなかに「壺月」という名の羊羹と「黒光」という名の餅があった。壺月は海旭の号であり、黒光の海旭への傾倒ぶりと二人の深い仏縁を物語っていた。

そうそう、NHKのラジオ番組でせっかく海旭先生に再会したのだから、久しぶりに壺月をいただこうかしら。

常備の壺月を切り出して半欠けはおぼった黒光の表情がにわかに和らいだ。海旭の講話の不思議な魅力が懐かしく思い出された。海旭は激しい吃音症だった。おまけに極度のはにかみやで相手の顔を正面から見ることで、きず斜めから話しかける。それが黒光にはなんと好ましかった。黒光だけでなく多くの

人々を惹きつけ、崇拜者を生んだ。

黒光の表情がさらに緩み、口元がほころんだ。先生は語学の達人だったけれど、なぜか外国語とお経は吃音にならなかった。そして、そのお経のすばらしかったこと。あれこそ法悦の世界。

壺月を舌の上で優しくころがして味わいながら、黒光は海旭の講話と読経の恍惚を思いおこしていた。

*

海旭と黒光をつなぐ頭山とボースにふれられていないことに不満を覚えながら、ラジオ番組を聞き終えた黒光は、しばらく回想にふけたあと、海旭の人物像があまりにも軽く今風であることにあらためて気づかされた。あの謹厳一途な海旭が、かくも自由闊達で融通無碍に描かれているのは、戦後民主主義を謳歌する昨今の世論と風潮におもねってのことかと勘ぐった。黒光にもっとも違和感と意外感を抱かせたのは、海旭のドイツ留学時代

昭和五年十月撮影



明治三十三年五月渡歐を前にして



明治三十三年四月九日に逸て

を紹介したこんな一幕だった。

日本人留学生仲間でパーティが催された。発起人兼幹事は海旭。肉をさかんにばくついている海旭を仲間がこう茶化する。「肉食妻帯は出家の固く禁ずるところじゃないか」

すると海旭は、「そんな昔のタブーにこだわることはなからう。好きだから呑む、好きだから食う：第一、葉っぱばかり食ってたんじゃ、人間の頭に健全な思想は宿りつこないからな」といなした上で、一句浮かんだといつて披露。

「出山の如來にビール捧げばや」と乾杯の音頭をとる。

その日は十二月七日で明日は成道会。すなわち釈迦が山を出て菩提樹の下で悟りを開いたとされる、仏教徒にとっては聖なる日（こころ）を寿ごうという趣向だが、なぜビールなのか。その心は？

「釈尊だって当時ビールがあれば、飼料くさ

い娘の牛乳なんかよりビールのほうを吞まれたに違いないよ」と海旭。

釈迦は悟りを開いた数日前に、長い断食で空腹の極にあつたので、たまたま通りかかった農家の娘からしぼりたての牛乳の布施をうけて元氣を取り戻したという逸話を巧みに援用してみせたのである。

宴たけなわとなり、話題はご当地の今夜のオペラに。行ってみたいと悔しがる一同に、海旭は予め手をまわしておいたプレミアつきのチケットを示して誘う。一人が「ベートーベンとお経を読むのとどっちが芸術的感銘が深いと思う」とまたぞろ半畳（はんじょう）を入れると、すかさず海旭は「つまらんことをいうな、お経はお経、ベートーベンはベートーベンさ」とかわして、みなを促す。「よし行こう。出山の如來にオペラを聞かせばや」

海旭のなんたる軽妙なる如才のなさ。禁酒禁煙運動の先頭に立ち、生涯不犯を貫いた海

旭の謹厳一途を崇敬していた黒光だけに、このエピソードにはわかには信じられなかった。しかし、まさか天下のNHKが捏造^{ねつぞう}をするとは思えない。おそらく存命の留学生仲間取材をして得たエピソードに基づいているのだろう。しばし思案をめぐらせているうちに、黒光の胸中にこんな想念が去来した。自分がこれぞ海旭先生と信じていたものは実は海旭の一部でしかなかったのかもしれない。稚氣^{ちき}あふれる海旭もまた、若氣^{わき}のいたりではなく、死の最後まで海旭の一部をかたちづくっていたものではなかったか。一生不犯の海旭も、留学時代の稚氣あふれる海旭ともに海旭ではないのか。

ひるがえってみれば、黒光自身もそうだった。若い時分にはもて余すぐらいに稚氣が横溢^{おち}していた。その稚氣が逆境を生きる内燃機関でもあった。もっぱら真面目腐った悩みばかりを海旭には打ち明け、その答えに感動もし師事をしてきた。しかし、女学生時代の危

ない恋愛遊戯の顛末について語ったことなどなかった。もし話していたら、海旭だってドイツ留学時代、そして帰国してからの「女扱い」について、禁酒運動についての裏話も話したらえたかもしれない。(つづく)

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭の母校であり校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

「和」の朝めしがなぜうまいか

昨年の今頃、一冊の本を上梓しました。外題は『朝めしの品格』（アスキー新書）。何やら便乗くさいタイトルだと思いでしょうが（笑）、これは出版社が付けたもので、多少抵抗は試みたのですが、本にしてくださいというのだから、ま、いいか……と。

それはさておき、この本を書くきっかけとなったのは、ずいぶん前に聞いた——正確に言えば雑誌で目にしたある人のある言葉でした。いわく、「朝・昼・晩の三食のうち、朝めしが一番うまい。なぜなら食間がもつとも長いからだ」

名言だと思いました。空腹に勝る何とやらと言いますが、たしかに晩めし・朝めしの間が一番長い。アナタの三食は知らないけれども、仮に朝めし七時、昼めし十二時、晩めし七時だとすれば、晩めし以降は半日も何も食べないということになる。実は、西洋の人々も同じことを思ったようで、英語で朝めしはブレイク・ファストと言います。このファストはファストフードの「速い」という意味ではなく、「断食」のこと。ブレイクと

は「破る」だから、すなわち「断食を破る」という意味になります。つまり、その長い食間を断食に喻えたわけですね。そして、昔のヨーロッパの人々は、「断食明け」であるその日の最初の食事を、一日でもつとも大事にしたそうです。

しかし、朝めしがうまいのはそれだけだろうか。題材としたのは「和」の朝めしです。朝はパンという方もおられるでしょうが、食や栄養の専門家でもない一介のフリーの編集者であるぼくが関心を持つのは、日本人だもの、それしかありません。そう思って本屋の書棚を見ると、「簡単朝ごはん」といったレシピ集はあっても、朝めしの意味などについて書かれたものはない——つまり、先人のいないテーマだったから、やってみようと思ったのでした。では、和の朝めしとはどんなものか。「めし（コメ）・味噌汁・漬物」を基本三点とし、それに例えば納豆とか玉子、海苔など「朝めしの友」が添えられたごくごくシンブルな献立で、いまの日本人にはこれがスタンダードになっていると思ったからです。すき焼きや天ぷらとい

った、いわゆるご馳走はありません。なのに、このシンブルな食事が実にうまい。ほくなど誘われて温泉に行くと、旅館の朝めしのご馳走より翌朝の朝めしがうまく、喜びを感じることがよくあり、それもこの本を書く動機になったのだと思います。

そうしたことから、日本人には「めし・味噌汁・漬物」という三点セットに食の喜びを感じる——いまふうに言えばDNAにすり込まれた——「何か」があるのでは、と考えました。

伝統的な和のシンブル食への回帰を提唱してベストセラーとなった『粗食のすすめ』の著者・幕内秀夫さんはこう言っています。

「『ごはん・味噌汁・漬物』の組み合わせは日本人の食の『基本食』です。(略) この基本食はこの組み合わせだけで、食の七割がまかなえるほどのすばらしいものなのです」(『幕内秀夫のがんを防ぐ基本食』筑摩書房)

「基本食」とは飽きずに食べられる伝統食ということ。しかもそれは、「食の七割がまかなえるほどのすばらしいもの」と言っています。

「飽きずに食べてきた」ということを裏返せば、「うまいからこそ食べてきた」という意味です。しかも、「それだけで食の七割がまかなえる」というほど、日本人にとって栄養価や機能の面でも優れている。つまり、「うまい」と「十分」という必要十分条件がこの朝めしにはあるのです。

幕内さんは、がんをはじめ食による健康被害を食い止めるには、この「めし・味噌汁・漬物」という日本の食生活に戻ることだと提唱しています。しかし、現代のとくに都市生活者にこれは強制できないから、実行できるとすれば朝めしだ、と言います。というのも、昼は外食で中華やイタリアン、夜は男なら付き合いで飲みに行き、シメにラーメンを食べて夜遅く帰る——こんな暮らしで、朝めしがうまいわけではない。

言い換えれば、「めし・味噌汁・漬物+朝めしの友」の朝めしを食べてられているかどうか、ということ。

アナタはどうか……ほくは(笑)です。

(つづく)

変な駅 気になる駅

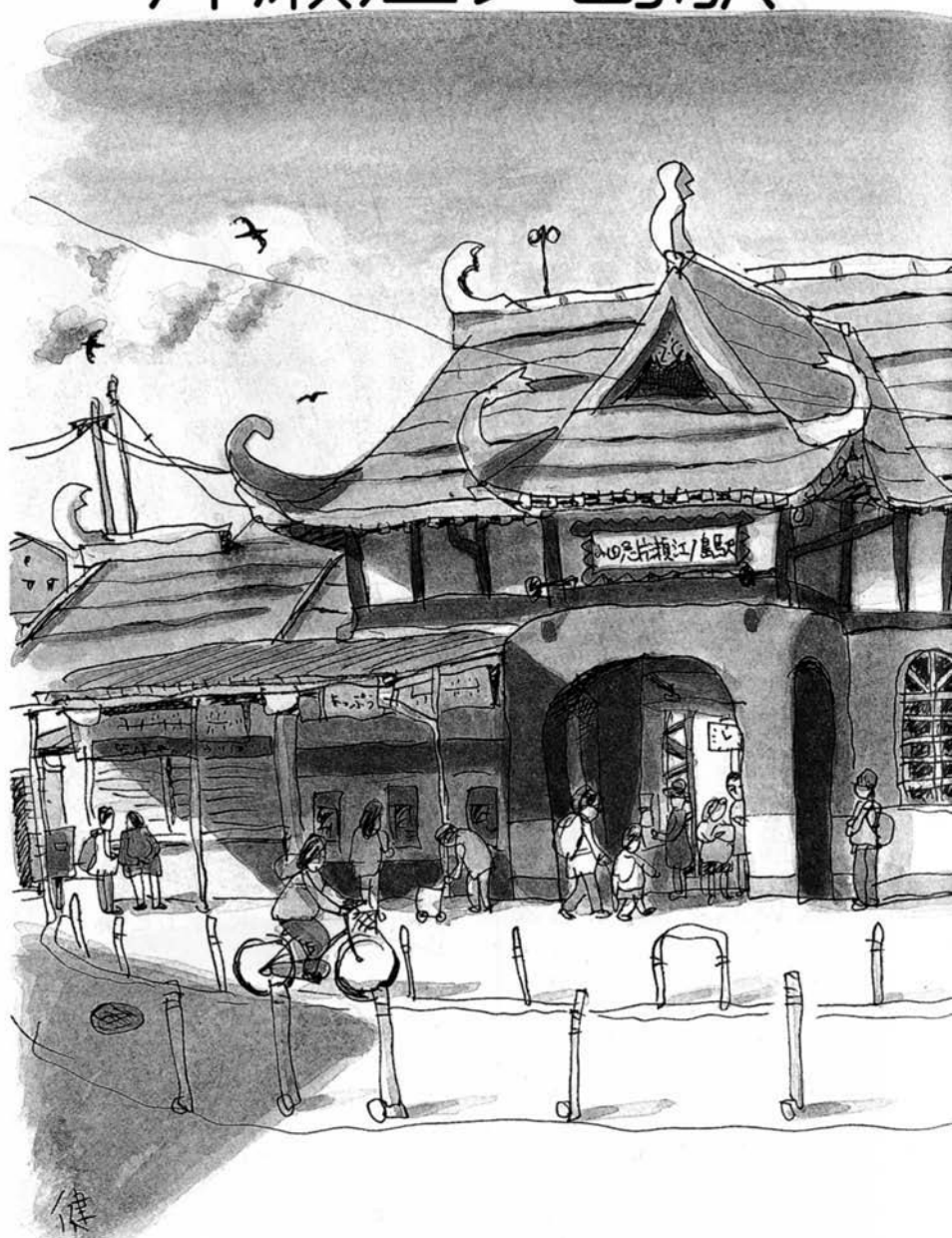
《凸凹コンビがおくる駅前シリーズ第一弾》

え 村上健
ぶん 長谷川裕



小田急片瀬江島駅

小田急 片瀬江ノ島駅



終点は色鮮やかな ピッカピカ

見れば、誰しも「なんだこりゃ」と開いた口がふさがるまい。深紅の柱、純白の壁、緑あざやかな屋根には黄金色に耀く鵜尾。キンキラキンである。ド派手である。なんでも竜宮城を模したとか。駅舎というよりはもはや遊園地の入口のたぐいだ。

ところが驚いたことにこの駅舎、一九二九年四月一日、小田急江ノ島線開通当時の姿をそのまま保っている。旧いのだ。ウォール街の大暴落にはじまる世界大恐慌の年だが、



すでに日本はその二年まえから不況にあえいでいた。小田急線の本線が新宿―小田原に開通したのは一九二七年。この年、金融恐慌が勃発、生まれたばかりの小田急は不景気に直撃され、経営不振に苦しんでいた。

とにかく一人でも多くのお客さんに乗ってもらいたい。当時すでに大観光地であった江の島と新宿を直結する江ノ島線は、生まれたばかりの小田急にとって日銭を稼げる生命線。こんな派手な駅舎を建てたについては、景気づけもあったのだろう。くわえて時代はエログロナンセンスの全盛期だ。ちなみにあの巨大にして不気味な大船観音像も、この年に建造が始まっている（戦局の悪化で中断し、完成したのは戦後だが）。

しかしですなあ、まがりなりにも公共建築ですよ。よくもまあ、戦前のお堅い役所がこんなおバカな駅舎を認可したものだ。昨今、模図かずお邸やら、麴町のイタリア文化会館が周囲の景観を害する云々と騒がれたが、いやはやこの竜宮城に比べたら可愛いものじゃありませんか。

ともあれそれから八十年、片瀬江ノ島駅は、江ノ島の参詣客や海水浴客など、年間六百五十万人もの人々が降り降りする観光の要衝となった。どんなに派手な建築も、八十

自筆の松が、花をたくさんつけています。



江電の駅から江島へ続く参道にある旅館

年も星霜を経れば、それなりに古びて澁さを身につけるものだが、しょっちゅうペンキを塗り替えるのであろう、片瀬江ノ島駅は色あざやかなピッカピカで、映画のセットのような嘘くささをしっかり保っている。

ところでこの竜宮城様式の駅舎を前に、筆者はなぜか東京駅を思い出していた。片瀬江ノ島駅と縁もゆかりもない東京駅だが、どこかこと通底するものを感じるのだ。はっと気がついた。あ、そうか。辰野金吾の設計になる壮麗

むかしは駅前旅館の メッカ

なレンガ建築の東京駅は、まっすぐ皇居に向いて立っている。すなわち天皇陛下の乗り降りする駅である。対するにここは江の島へ向いている。そう、ここは弁天さまの乗り降りする駅なのだ。どうも小田急は靈験あらたかな江の島の弁天さまを江ノ島線に乗せて、新宿の小田急本社まで勧進したつもりだったんじゃないだろうか。

江の島の洞窟に弁天さまを祀ったのは源頼朝といわれるが、そもそも江の島は遠く縄文時代からの聖地である。最近、島の植物園を整地したら、九千年〜八千年前の縄文土器の破片がざくざく出土したという。

江戸時代には、江戸庶民が四泊五日でお参りする手頃な参詣地として大繁盛した。江の島詣での善男善女はひきもきらず、島への参道には旅館がずらりと軒を並べ、寄ってらっしゃい、泊まってらっしゃいと、客引きが声を競ったそう。

客引きと言えば、昭和三十年代ごろまで「駅前旅館」というものがあった。有名なのは上野駅周辺だったが、地方都市や観光地のちょっとした駅の駅前には、小ぎれいな旅館が軒を揃え、番頭たちが外に出て、幟を押し立て旗を振

射的、シラス井、シラスもんじや、
シラスピツア、インド料理...。
何でもありマス、江の島の街道。



り、客引きに精を出したものである。

ここ片瀬江ノ島がその駅前旅館のメッカであったことは意外と知られていない。

作家の井伏鱒二は長編『駅前旅館』で、そのあたりの事情を次のように描く。

「明治、大正から昭和にかけて、戦前まで、江の島、特にあの江の島へ渡る橋の手前、片瀬の旅館街は、番頭たちが呼び込みの腕くらべをする晴れの場所でした。言うならば、

番頭修行の大学校であり大学院でございました。」

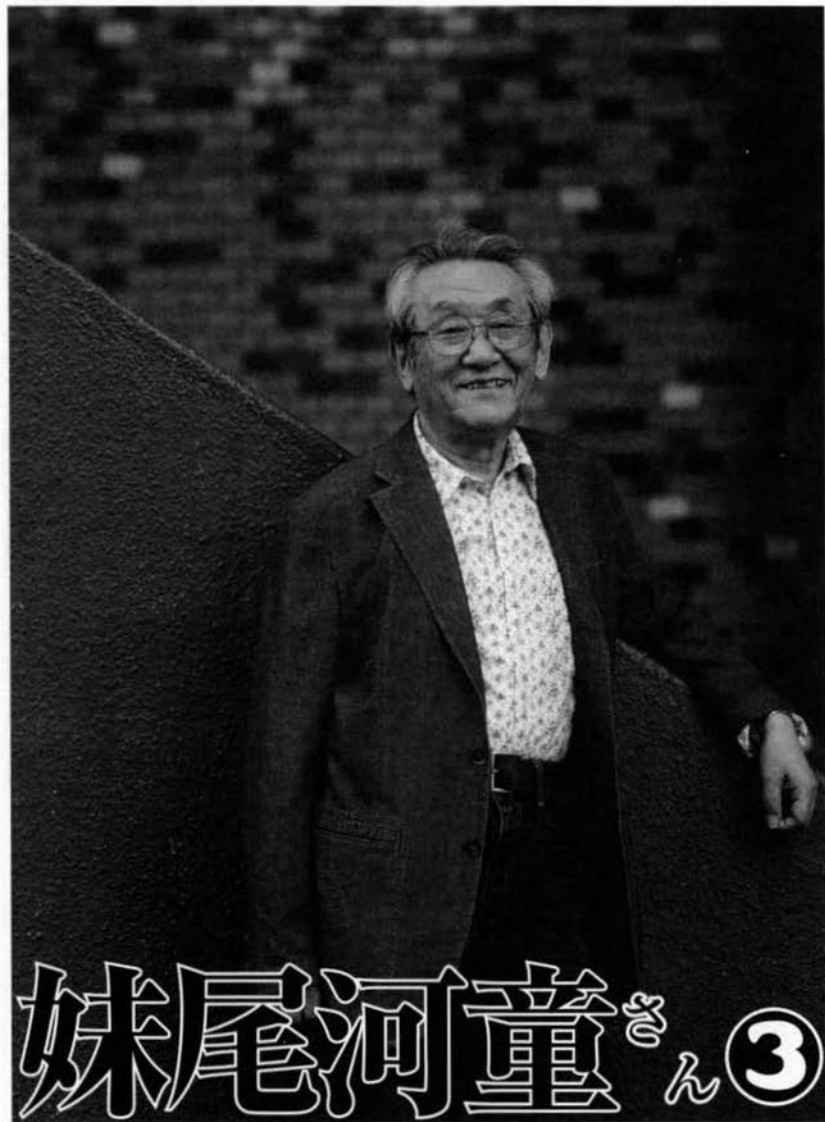
片瀬江ノ島駅の改札を出て、境川に架かる橋を渡ると「すばな通り」にぶつかる。江ノ島のすっ鼻だからすばな通りというのだそうで、これが江の島への参道である。そして、ここがかつての旅館街であった。いまでは四メートルほどの道の両側には、土産物屋や江ノ島名物のシラス丼などを食べさせる食堂がずらりと並ぶ。そのなかにいかにも戦前からのものと思われる風情の旅館が数軒残っており、かつての姿が忍ばれる。土産物屋や食堂の前身はおそらく旅館だったのであろう。

もはやすばな通りから番頭さんは姿を消したが、食堂のおかみさんが道に出て、「シラス丼いかがですか」と、呼び込みに精を出すかと思えば、その隣りではインド人らしき若い男がプラカードを持ち、「インドの本格カレー、オイシイヨ」などと、片言で客引きをやっている。なるほど旅館街の伝統は継承されているようです。

それにしても江の島で本格カレーねえ。あ、そうか、もとはといえば弁天さまはヒンズー教の女神で、サラヴァステイー。これが仏教、神道に取り入れられて弁天さまとなったのだから、やっぱりこれでいいのである。

連載

会いたい人 関 容子



妹尾河童さん ③

撮影/タカオカ邦彦

藤原義江が河童さんの人生の公私にわたって深く関わっていたことには、びっくりした。

「ぼくは家の中では藤原さんを息子の義昭君と同じようにパパと呼び、あき夫人をママと言っていました。川柳に『居候、三杯目にはそつと出し』というのがありますが、そんな遠慮なんかしたことがなく、居心地のいい家庭でした。ママに内緒でやっていたのはパパ宛ての恋文を運ぶ『文使い』でした。手紙は銀座の洋装店に届くことになっていたのですが、連絡があると受け取りに行き、パパに渡していました。いつもうまくいっていたのですが、『お蝶夫人』のアメリカ公演に出演する直前に、事件が起きたんです。あれは1953年でした。ぼくがパパに渡した手紙は、アメリカ公演で『お蝶夫人』の主役を歌うことになっている、パリ在住のS嬢からのエメールでした。パパは手紙を上着の内ポケットに入れたのをすっかり忘れ、別の上着を着て出かけました。ママはいつものようにパパ

が脱いだ上着を片づけているとき、S嬢から手紙を見つけてしまったのです。

五分とたたずに引き返してきたパパが、あたふたと二階へ駆け登ると、ママの怒った声が二階から聞こえてきました。『あの手紙を探していらつしやるんなら、二階の窓から隣の塀越しに投げ捨てました。そんなに欲しければ、探しに行かれれば！』ママの大声を聞いたのは、初めてだったので驚きました。それまでママは、パパの数々の艶聞を耳にしても、嫉妬めいた言葉や愚痴は一度も言わず、『しようがないわね。魚屋に猫を飼ってるよ。うなもんだから』と笑っていましたが、この時は違っていました。その手紙がキツカケで、とうとう離婚にまで発展してしまいました」

あき夫人は離婚後も「藤原あき」の名で、NHKの『私の秘密』のレギュラー回答者として活躍し、後には参議院全国区に出て一位当選している。

「ママは藤原義江さんにとって先生であり、



「何でもやりたくなる」という河童さんだけに趣味は多い。写真の射撃と陶芸は奥様の風間茂子さん（写真下）と一緒に楽しんでいる。ちなみに30歳からクレー射撃を始めたが、36歳の誕生日（1965年6月23日）に、1ラウンド25発中23発を命中させて大喜び。その後は記録をクリアできず、現在は17発がやっとだそう



母親でもあったのです。子供の頃から何も知らずに大人になった人に、礼儀作法や話し方、文章の書き方まで、全部ママが教えていたんですから。もちろん藤原義江さん自身の天性の才能と努力によって、日本にオペラが根付いたのは確かですが、それを支えたママの功績は大きいです。昔は、今のように舞台の両脇に日本語が出なかったから、原語を翻訳した日本語の歌詞で歌っていました。その訳詞を担当していたのが、実はママだったのです。ペンネームを柳園子といていたので知らない人もいました。彼女は、原語を日本語に置き換えるのに、歌えて聴きとれる日本語を目指して、夜遅くまで検討していました。だから藤原歌劇団のボスのパパも、ママには頭が上がりませんでした。あるときぼくが、「パパはどうして、あんな女性に惚れるの?」と聞くと、「叱るとゴメンナサイと泣いて謝るのが可愛いんだよ」には呆れました。彼の自著に『歌に生き、恋に生き』という本があ

りますが、文字通り藤原義江は、恋多き人でした。実はぼくも「女性大好き人間」だったので、忙しくしていましたが……（笑）。

河童さんの最初の妻は、この藤原義江さんの推薦だそう。藤原歌劇団の合唱部について、オペラ歌手を目指していたソプラノだった。

「パパが自分のことを棚に上げて、ぼくの女性問題を心配してくれるなんて可笑しかったのですが、『舞台美術家になったのだからイイ仕事をするためにも、家庭を持つて落ち着いたほうがいい。清水美佐はどうだい?』と言ったのに驚きながら、ナルホドと思いました。名前が挙がった清水美佐は、性格のいいお嬢さんでしたから。でもぼくは、彼女に恋愛感情を抱いていなかったの、『大事に育てられている一人娘らしいから、無理だと思っています』と告げると、『じゃ、ぼくが親父さんを説得してやろう』と、パパ自ら乗り出して話を纏めてくれました。結婚式は藤原歌劇研究所のホールで挙行。ぼくが二十五歳、相



1984年6月23日。「SKD歌舞伎座公演」の舞台美術を担当。終演後、河童さんの54歳の誕生日祝いにと、踊り子さんたちがケーキのローソク代わりに足をあげて踊ってくれた

手の美佐は一つ年上で、会費が百円の人前結婚式が当時は珍しかったのか、日本テレビの中継車がやって来ていました」

ところで、河童さんはどうしてあの大ベストセラー『少年H』の続編を書かないのかと訊ねると、返ってきた答えに笑ってしまった。『もし書くと、本の帯に『子供は読まないで』と書かなくてはならないから』だった。ということは、結婚後もかなり忙しかったらしい。

美佐さんは、舞台美術家になった河童さんが、一挙に貧乏になってしまったのも苦にせず、明るく暮らしていたようだ。自分の夢であつたソリストになるのも諦め、三年後に娘の真美ちゃんを産んだ。ところが、その二年後に急性脳膜炎で突然亡くなつてしまった。

「本当にショックでした。でも、オペラ『ヘンゼルとグレーテル』の舞台デザインを渡す締切りが迫っていたので、二歳八カ月の娘を膝に乗せ、抱きかかえながら描き上げました。その絵は今まで使ったことがないブルーが入

った森だったので、いつもより幻想的でした。心境が反映したのかもしれませんが。後に二代目のカミサンになるモコが（風間茂子さんの通称）その舞台を観ているんです。

彼女との出会いは、平均年齢二十五歳の若者が集まつてつくつた『スタッフ・クラブ』というグループの事務所でした。メンバーは指揮の岩城宏之や外山雄三、作曲の林光、能の観世栄夫、演出の栗山昌良、衣装の緒方規矩子、舞台監督の佐々木忠次、舞台美術の河童など、ジャンルを越えた面々でした。血氣盛んなのはいいが、みんな貧乏だったから、会費の滞納者がいて、事務を担当していた女性の給料も遅配が続き、三人も次々と辞めていったのには困りました。四人目に来てくれたのが、風間茂子でした。実は彼女は、林光のいとこだったので、強引に頼みこまれたのです。ありがたかつたのは、事務能力も電話の応対も抜群だった上に、性格はサツパリしていて頼りがいがあつたこと。それをいいこ

とに、恋多き岩城とぼくの二人が、プライベートルな電話連絡を彼女に頼んでいました。当時は携帯電話なんか無かった時代だから、ひよつとして親父や兄貴が出たら困る。そこで女友だちを装って相手呼び出してもらってから、受話器を受けとっていました。だから岩城とぼくの行状は、全て彼女には知られていたわけです。美佐も風間茂子も顔見知りで、お互いによく知っていました。ところが、一年とちよつとで風間茂子が事務所を辞めることになった。仲間たちは『お前と岩城が、恋人への電話の仲立ちを頼むから、彼女はウンザリして辞めたんだ』と怒りましたが、それは違ひうんです。実際は、病気の療養のために辞めたんです」

その一年半後に美佐さんが急逝。葬式の三日後に、美佐さんのお母さんから「早くお嫁さんを探しなさい。誰かいないの？ 真美のためにも、一日も早く家庭を再建しなさい」と言われて、河童さんは驚いたという。

「それで、恋人に電話をしたら、『あなたの奥さんはゴメンです。だってタイヘンだから』とあつさり断られた。参ったなあと思案していた時に思いだしたのが、『風間茂子』だった。でも、彼女とは一年半も音信不通だったし、今さらプロポーズなんて虫がよすぎて、照れくさい。どうしたものかと思案していたら、栗山、佐々木の両君が『ぼくたちが代理でプロポーズしてやる』と、まだ独身だった彼女を呼び出し会ってくれた。てつきり彼女は、河童を慰める会の幹事をやってくれ、という話かと思っていたら『河童のカミサンになつてやつてくれないか』だったのに仰天して、考えさせてほしいと言つたらしい。無理ないですよ。ね。ぼくの今までのことを彼女は知っている上に、二歳八カ月の女の子がいたんですから。彼女は娘との相性を知るために何回も会いに来て、慎重に考えていたようです。やつとOKの返事をくれたのは、二カ月半後のクリスマス・イブの夜でした」

河童さん三十歳、茂子さん二十八歳。二人は、結婚したからといって一生別れないと誓いを立てるのはヘンだと意見が一致し、一年契約の結婚を決める。以後、毎年二月六日の結婚記念日に、お互いの意志を確かめあい、契約を更新しているという。なんと四十八回も契約を更新したそうだから、河童さんのあのビョーキも再発しなかったのだろう。

「いやー、更新してもらえないかな、と思う年が三回ほどありましたね。それはぼくの方が悪いのですが、いまはイイ子です。あのー、話題を変えてもらえませんか？」（笑）

河童さんが、藤原義江さんに歌を辞めさせたと聞いたことがあります、本当ですか？「本当です。パパの六十三歳の時のリサイタルを聴いていて、高音が出なくなっていたから、思い切つて、『もう歌を辞めたほうがいいのでは？』でないと藤原義江という名歌手の名前に傷が付きますよ」と、正直に言つた。パパは激怒しましたね。あまりの立腹にぼく

は自分の部屋に逃げ込むと、ドアを靴で激しく蹴つたので穴があきました。いま思うと、若造が大歌手に向つて酷いことを言つたなと思います。ママがいらないのだから、ぼく以外に言う人間はいないと思つたから……。パパはその後、二回リサイタルをやつた後、キツパリと歌うことを辞めました。あの時代は、彼が出演しないとチケットが売れなかつたので、自分の声にあわないオペラにも登場し、ガンガン歌つていたから、かつてのリリックな美声を潰してしまつたんです。後年、義昭君が『息子のぼくでも言えないことを、よく言つてくれた。パパは君のそんな氣質を面白がつて、居候をさせていたんだと思う』そう聞いてホツとした。ぼくにできた唯一一つの恩返しだったのかもしれない。パパが亡くなったときと同じ七十八歳になつたいま、彼に教えられたことが沢山あるのを思い出しています。『マナーとは何だ』『人への優しさ』『粹とは』など……。本当に大恩人でした（おわり）

第二十四回

江戸を歩く

運河の町



大江戸ウォーカ―
森 清鑑

神田川

柳原土手

神田お玉が池、千葉周作玄武館道場の門を出て北に二角ほど行くと、和泉橋。神田川に出る。大川に向かって滔々と流れる神田川。川の南側、和泉橋の左右はこんもりと築かれた土塁。その土塁の上に柳の木が連綿と連なり、美しい田園風景を奏でている。現在では、想像もつかないがこれが柳原土手（柳原堤）である。長谷川雪旦は、すっかり失われた、

この光景を対岸の佐久間河岸の方から描いている。絵の上左の方に川は流れ、遠く大川近くの浅草橋が見える。和泉橋南詰めの広小路にはちらほら民家があり、土手が囲んでいる。和泉橋北側には材木が林立し、佐久間河岸。中央、雲に遮断された下の光景は和泉橋の西側、柳森稲荷の光景。土手の柳に囲まれた稲荷。神田川に面して建っている。その手前には古着屋が軒を連ね、柳原通には武士や町民が行き交っている。こころなしか二本差しの



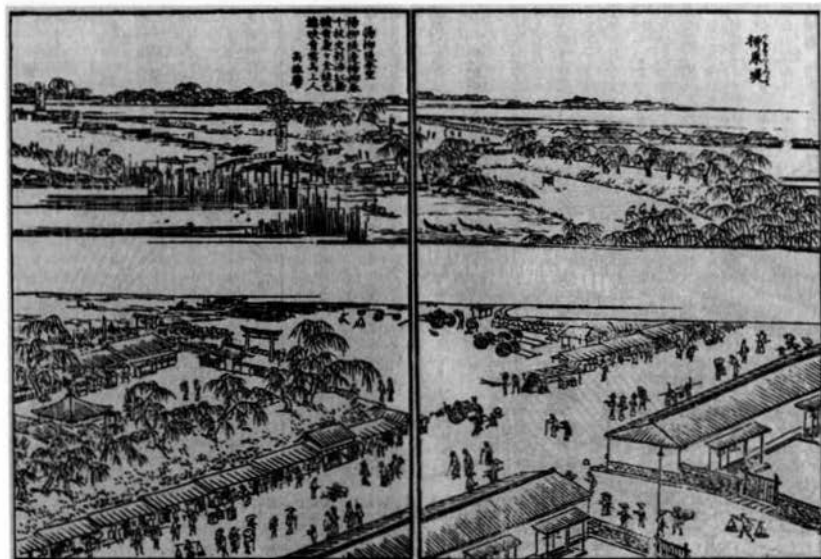
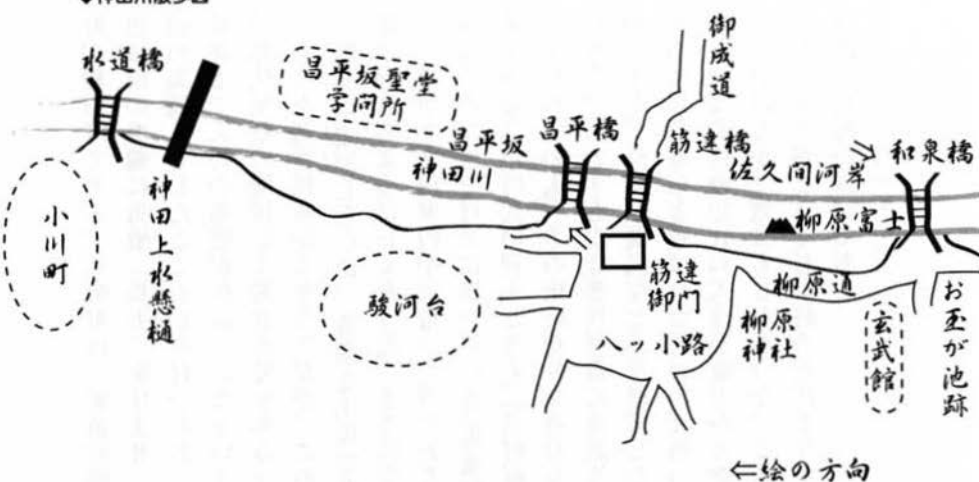
数が多し。この通りを東の浅草御門に向かつて歩く。左手に柳原土手。神田川の堤防として築かれた土手に風にそよぐ柳を植え、風光明媚な景色にしたのは、八代將軍吉宗である。彼はここもそうだが、品川の御殿山や王子の飛鳥山に桜の木を沢山植え、江戸っ子の花見の名所とした。他にも方々に木々を植え、いわば江戸の緑化政策を推進している。

郡代屋敷、馬喰町、浅草御門

火除地を兼ねた広い柳原通を行くと間もなく、道の右手に関八州郡代代官所の黒塀が長く続く。関八州、東海にわたる幕府直轄地の年貢徴収、治水、領民紛争の処理を行った、江戸っ子が郡代屋敷と呼んだ処である。屋敷に面して広場が展開する。浅草御門である。堅固な桁形御門で石垣に囲まれた中に人々が入り、左手に出る。眼前に神田川が流れ、浅草橋を渡り、広い御蔵前通を抜けて浅草方面に行く、主要な管理門。御門広場の前は馬喰

郡代屋敷、馬喰町、浅草御門

火除地を兼ねた広い柳原通を行くと間もなく、道の右手に関八州郡代代官所の黒塀が長く続く。関八州、東海にわたる幕府直轄地の年貢徴収、治水、領民紛争の処理を行った、江戸っ子が郡代屋敷と呼んだ処である。屋敷に面して広場が展開する。浅草御門である。堅固な桁形御門で石垣に囲まれた中に人々は入り、左手に出る。眼前に神田川が流れ、浅草橋を渡り、広い御蔵前通を抜けて浅草方面に行く、主要な管理門。御門広場の前は馬喰



◆江戸名所図会 柳原堤

町、横山町である。馬喰町は、家康が関ヶ原出陣前の準備に馬喰（馬方）を住ませ、数百頭の馬揃えをしたところから付いた名。明治維新まで大勢の馬喰が住んでいたという。この郡代屋敷に隣接して初音馬場がある。近くにあった初音稲荷から来た名だが、この馬場の特長は追回し^{おいまわし}といひ、周囲を土堤で囲み、馬が回れるようにしてあった。まさに今でいうパドックを民家の中に造ったのである。雪旦はこの光景を丹念に描いている。馬喰町は、華やかな江戸時代の到来とともに浜町堀まで八十軒以上の大、小の宿屋が軒を連ねることになる。言わずもがな郡代屋敷に訴訟等のために来た、直轄領農民などが長逗留^{じやうど}したことから俗に公事宿^{くしやど}と呼ばれた。いわば処の人々にとつて素性の知れぬ人達が地方からやってきたわけだが、気にもしなかった。この雰囲気を泊まり客と富くじを絡め創作された咄が落語「宿屋の富」である。

落語「宿屋の富」

舞台は、馬喰町のあるはやらない宿屋。飛び込んで来た、ある客が「家には奉公人が五百人、あちこちの大名に何万両と貸している、沢庵石の代わりに千両箱を使っている、このあいだ、入ってきた泥棒に好きなかだけやると言ったのに千両箱しか持っていかなかった」……などと吹きまくる。人のいい宿の主人、これはてつきり大金持ちだと感心し、「家は宿屋だけではやっていけないので富札も売っているが一枚買ってくれませんか」と持ちかける。客は、「千両ぼっち当たったってじゃまになるだけ」と断る。それでもことのなりゆきで一枚買うことになる。宿屋の主人、「あなたは大層なお金持ちだから、万が一当たったら半分をもらっていいですかね」との約束を取り付けた。客は部屋に入り、一人になると、「ああ、なけなしの一分を富籤にとられちゃった」。でもあれだけ吹きまくったから、

当分、宿賃の催促はないだろう。ままよ、飲み食いして逃げちゃおう。翌朝、二万両返しにくる奴に断つてくると宿を出た客。なんとはなしに湯島天神のほうに足が向く。寺社奉行立ち会いの上、いよいよ富の抽選開始。「子の三百六十五番、少しの違いだな。うわ、当たった!」。そのまま宿に帰ると蒲団を被ってブルブル。旅籠の親父も天神に来て「ウワァーッ!」。飛ぶように宿に帰ると二階に飛んでいき「あたあ、千両当たりました」。蒲団を被っている客「うるせえなあ、貧乏人は。千両ばかりで。お前さん、座敷に下駄のまま上がってきたな」。「下で祝の支度ができております」。「いいよ、千両ばかりで」。「そんなこと言わずに、さあさ」と宿の主人がぼつと蒲団をめくると、客は、草履をはいたまま。



◆江戸名所図会 馬場町初音馬場

両国西広小路

浅草御門前の広場はそのまま両国西広小路に繋がっている。広大なこの広場は明暦の大火後、火除地として整備されたものだ。そしてこの広小路の北側、神田川に架かる橋が柳橋である。流れはここを最後に大川に注ぐ。両国広小路には様々な店が出て、賑わった。広小路に接して南は吉沢町。「この辺り船宿多し」。江戸名所図会で長谷川雪旦は大勢の人々でこった返す、辺りの情景画に書き込んでいる。的場、芝居小屋、船宿がびっしり。広小路の東中央から大川を跨いで本所にたどり着く、長さ九十六間という、途方もない大橋、両国橋がどうと架かっている（現在の両国橋より南に位置している）。

筋違御門

もとに戻って、今度は和泉橋から西へ柳原通を歩く。和泉橋は、北に渡ってちよつと行

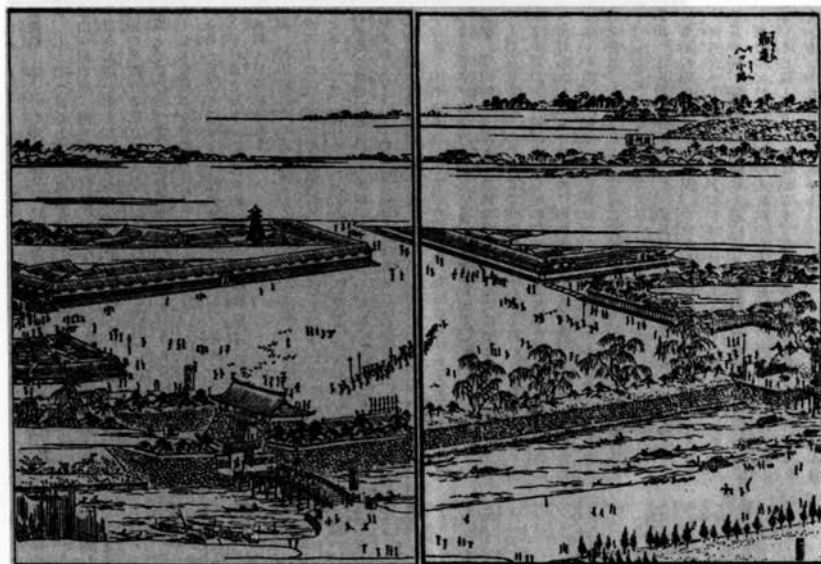
ったところにある広大な藤堂和泉守上屋敷からついた名である。江戸城整備や江戸の河川造りに尽力した、藤堂和泉守高虎を藩祖とする。橋を渡らずに柳原土手を西に歩くと、すぐ右側の川沿いに柳原富士、柳森稲荷がある。川の対岸は佐久間河岸。そのまま行くと、もなく筋違御門に出る。これも堅固な枳形門で外神田に抜ける重要な砦の感があつた（現在の元交通博物館辺り）。歴代の將軍は、上野寛永寺墓参の際にはこの御門を抜け、筋違橋を渡り、火除広道から御成街道を行く。その名も御成道である。そして柳原土手はここから東の浅草御門まで約十町（二・一キロ）続くのである。江戸三十六見附の代表格が神田川沿いには多数設置されている。すなわち江戸の人々は神田川を外堀と称した。そもそも江戸初期の天下普請で本郷台地から南に続く神田山を東西に掘削して堀割を造り、平川の水を東の大川（隅田川）に直接流れるようにした。これが神田川である。これはひとつには洪水を防

ぐため、そしてもう一つは大川からの物資の運搬ルートを切り開くためである。これによつて各所に荷物の陸揚げ河岸が設けられた。

筋違御門の前は広場が形成されている。通称、八つ小路あるいは八辻原。この広場から八方向に道が続いていた。すなわち筋違御門、昌平橋、駿河台、小川町、連雀町、日本橋、柳原、小柳町に行く道がこの広場から発していたのである。当然、この広場は江戸でも最も大勢の人々が行き交い、賑わうことになった。雪旦の絵は御門に向かう大名行列や広場の西側に架かる、昌平橋に向かう人々の姿を描いている。それもその筈、中山道はこの昌平橋を渡り、本郷へと抜けて行つた。

昌平橋、聖堂

神田山を切り取って深く掘られた谷間を神田川が流れている。その豪快な風景こそ広重が描く「昌平橋聖堂神田川」の図である。江戸市民にとってとてつもなく景勝、風光明媚



◆江戸名所図会 筋違八ッ小路。左下、筋違御門、右下、昌平坂。昌平橋、聖堂

な地。絵の右下にわずかに昌平橋の欄干が覗く。これを渡って左に急な昌平坂を登ると聖堂の練り堀が見える。絵の左は切り立つ断崖。あまりの美しさに中国の名勝を引用し、小赤壁とか茗溪と喩える人もいた。

聖堂とは孔子廟であり、これに続いて昌平坂学問所があった（現在の湯島聖堂と東京医科歯科大学）。五代綱吉の命で創られたもので、学頭は林大學頭^{はやしだいがくとう}。幕府学問所として江戸期には天下の秀才が集まった。昌平とは、孔子の生まれ故郷、昌平橋^{しやうへいきやう}に因んでいる。

水道橋、神田上水懸樋

この景勝が水道橋まで続く。谷間を流れる神田川の南一帯は駿河台の武家屋敷が密集する。川をさらに西に行くと、水道橋が見えてくる。雪且が捉えた「お茶の水水道橋」の図である。この美しさは江戸の美を見事に表現している。船遊びで景色を愛でる人達。遠くに富士が聳える。だがここで重要なのは中央

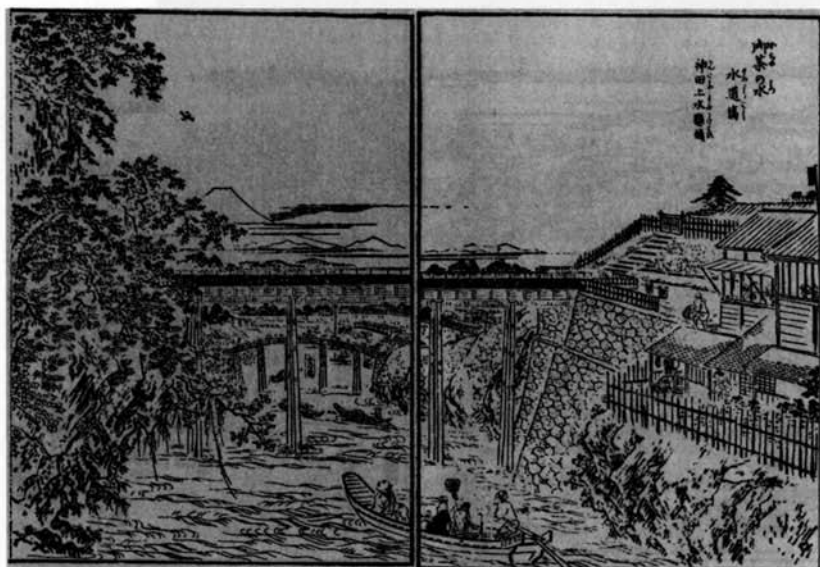
に描かれ、神田川に架かっている、神田上水懸樋^{かけとい}である。水道橋はこの懸樋の下に、遠方小さく描かれている。そもそも水道橋の名はこの懸樋から来ている。

江戸時代、広大な井の頭池の湧水は、善福寺川、妙正寺川と合流し、関口村（文京区関口、関口芭蕉庵）の大洗堰で神田上水と江戸川に分かれる。それからこの二つの水流は、ほぼ並行して東に流れている。神田上水は、江戸川の北側の町並みを一部水道管、あるいは露出した形で流れ、徳川水戸中納言上屋敷（小石川後楽園、東京ドーム）を突っ切り、武家屋敷の地中を通って、この水道橋懸樋を渡り、再び地中水道管を通じて神田、日本橋など一帯に飲料水を供給している。一方の江戸川は、江戸川橋を経て水戸屋敷の西側を南に下り、竜慶橋を経て船河原橋（飯田橋堰、通称どんどん）で二手に分かれ、一方は牛込御門方面のお堀へ、また一方は小石川御門を経て水道橋、隅田川へと流れるのである。とに

かく、数十キロを僅かな勾配を利用し、清水管理、木管、土管、石管を使って運び、江戸庶民に給水した神田上水は世界に誇れるものであった。「べらぼうめえ、水道で産湯を使った、神田の生まれよ」。この江戸っ子の誇りの弁はあながちうそではなかったのである。

【参考文献】

- 「江戸明治東京重ね地図」中川恵司編
- 「広重の大江戸名所百景散歩」人文社
- 「千代田区史跡ガイド」学生社
- 「江戸名所図会」角川書店
- 「江戸史跡事典」新人物往來社



◆江戸名所図会 お茶の水水道橋、神田上水懸樋の図



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●蜜柑

〔特選〕

箱詰めになみし蜜柑店に盛る

伊藤 臥郎

ダンボールの箱を開けて店頭山盛りにする。箱に詰められていたから、それぞれ押し合った形が残っている。その姿から見ると、どうも大安売りのものようだ。「箱詰めになみし」が句の裏側をのぞかせる。

〔佳作〕病む夫の上手に蜜柑すりけり

中島富士子

冷んやりと積まれし蜜柑天主堂

内藤 隼人

バス着きてどやどやと入る蜜柑山

浜口 佳春

●毛布

〔特選〕

子に毛布掛けて夜伽の朝近し

井村 善也

病気の子を見取るために、夜も寝ないでいる。朝方の冷えに、肩の回りの毛布を押さえたりする。「掛けて」がやや曖昧だが、そう

いうことと受け取ってよいだろう。愛情がひしひしと伝わってくる。

〈佳作〉

亡き夫のカシミヤ毛布手離せず

金谷 友江

老猫にお下がりをせし膝毛布

斉田 仁

膝掛け毛布母の形見のペルシヤ産

石原 新

●自由題

〈特選〉

秋の空灯台守りに波寄せて

浦田 ちあ

灯台守りの居た灯台がどんどん減って、今ではどれだけ残っているだろう。それはともかく空は晴れていても、大きな波が寄せてきているのだろう。灯台守りは波の様子をじっと見つめているものである。

〈佳作〉

玉砂利の音ぎしぎしと時雨坂

河合富美枝

初雷やおからの山に湯気が立ち

長谷川 裕

粕汁が好きで勝ち気で病身で

寺下 忠至

読者の声

誌上句会〈編集部選〉

■蜜柑

金色の夕映えに浮く蜜柑山
晴天に蜜柑の皮を干し溜めて
盆栽の小さき蜜柑誉めそやす
美しき紀伊に冠たる蜜柑山
引率の子等の大声蜜柑山
石仏に蜜柑を供え一家族
遺影の前灯のごとくみかん置く
皮となりしまい湯に浮く蜜柑かな
日溜りに蜜柑ひとつが残りをり
朝焼けのきれいな朝の蜜柑かな

河合富美枝
金谷友江
佐藤雅子
工藤浄真
井村善也
山口信子
齐田 仁
柏木貞華
山内桃児
鈴木真理子

■毛布

乳匂ふ毛布ほのかに冬日ざし
亡き母の毛布であれば捨てられず
歎びも悲しみも知る古毛布
ひたすらに毛布一途に居眠りぬ
古毛布船尾に垂れて干からびぬ
膝毛布掛けて発車の人力車
十二時の毛布の皺を伸ばしけり
毛布着て老婆積み売る葱わけぎ
小豆鍋毛布衣に一夜過ぐ

河合富美枝
中島富士子
佐藤雅子
工藤浄真
石原 新
浜口佳春
狭山 掉
中嶋いづる
柏木貞華

とりあへず蜜柑山盛りして家族
満月や墓地の蜜柑がまた太る

小林苑を
井口 栞

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇九年三月二十日

発表・『浄土』二〇〇九年五月号

選者・増田河郎子（「南風」主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

兼題

白魚

莖

自由題

■自由題

雪降ればシャンソン自ずと口ずさみ

林住期遊行期なりや冬の坂

ひと時を心遊ばす冬桜

利尻富士全山一島雪景色

紅さして浄土の土産七五三

微動だにあらざ一葉冬うらら

福耳の垂れて仏の寒さかな

冬晴れや魚の呼吸をまね歩く

きのふ見しところにつふも寒の鯉

加湿器の音のみ残す大伽藍

三度目の指輪をはめて初不動

佐藤雅子

金谷友江

中嶋富士子

工藤浄真

當門アサ子

池田伊吹

狭山 掉

中嶋いづる

齊田 仁

内藤隼人

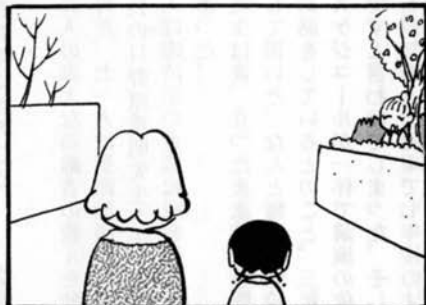
柏木貞華

さっちゃんね

58

かい目

かまち♡よろう



冬極まり春到来に首のびる

岱潤

最近お二人の偉大な高齢者の教えを聴く機会を得た。お一人は聖路加国際病院名誉理事長の日野原重明先生九十七歳。もうお一人は臨済宗の重鎮松原泰道老師百一歳であった。

日野原先生は夜、立ったままで一時間の講演をして頂いた。なんと毎月小学校を回り、お話をしているとのこと。三年後まではスケジュールが一杯で講演の依頼は無理ですと言われてしまった。そして東京の石原知事との約束で七年後のオリンピックの時にお話をすることになっていると、平然と言われた。先生を見て

いるとそのお話が自然に受け止められた。何とも驚異的な九十七歳である。

松原老師はさすがに今では坐禅も草取りもできなくなりましたと言われた。「しかしまだ拡大鏡を使えば字は読めますし、書くことも、話すこともできます。『生涯修行 臨終定年』を座右の銘として死ぬまで学を廃すべからずです」と言われた。何とも恐ろしい百一歳であった。

そんな松原老師が心にかけている「三しない」を覚えて頂いた。「一、無理をしない 一、無駄をしない 一、不精をしない」である。自分でできることは、できる範囲で謙虚に人任せにせずということなのだろう。世代を超えた教えと受け

止めたい。七十五歳は後期高齢者などと宣う今の政治家に、少しは学んで欲しいお言葉ばかりであった。(長)

編集チーフ
編集スタッフ長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻 二三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成二十一年一月二十日
平成二十二年二月一日

発行人

編集人

佐藤良純
大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三・三二五七八 六九四七

FAX

〇三・三二五七八 七〇三六

振替

〇〇・八〇・八・八二八七

雑誌「浄土」
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

法然上人鑽仰会の

本

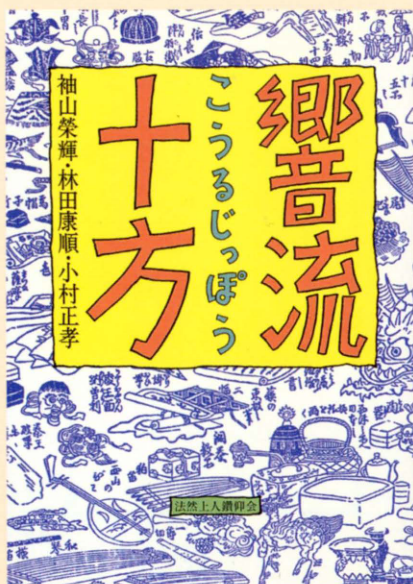
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



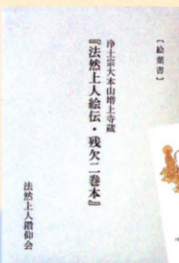
『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

信心歓喜

信心し歓喜せり
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

信仰者は気持ちを理解し、
歡びを分かちあう。

宗教は日常生活の延長上にあり、何人も尊く価値あることを信じるのはごく自然です。そして共通の信仰を分かち持ち、嬉しさを感じることもよくあるのです。

古損朽^{ふるく}廃^{はい}した状態のお地藏様を修復したとき、胎内仏が現れました。驚いたことに、頭を上にした小さなお像で、直ぐに逆児^{さかご}が頭をよぎりました。

お地藏様の前に、私は感じたままを人に説明します。医療技術が低い時代に、お地藏様は逆子の痛みを分かち合ってくれたのでしよう、と。ご婦人は説明に頷かれ、必ず手を合わされます。外国の女性もすぐ理解され、頭を下げられます。宗教は誰にでも分かり合えるもの。全ての人に信仰と喜びは共有です。